

お盆とお施餓鬼

毎年行われる施餓鬼法要は真言宗に限らず、日本の仏教寺院で広く執り行われる先祖供養の行事です。

生前の悪業により、餓鬼という飢えた鬼に生まれ変わった者たちは、餓鬼道という世界で、食べ物をお口にできず、いつも腹をすかせ、飢えに苦しみもがいています。そのような餓鬼にも食べ物を通して、苦しみを除いて成仏せしめ、そのご功德をご先祖の追善にめぐらせるとというのが施餓鬼の由来です。

その真意は仏教徒としてとても大切な、慈悲の心（他者を自分のごとく慈しむ精神）を共有し、「涵養することにあります。」

現在では施餓鬼は季節を選ばず行われますが、もともとはお盆の前後に執り行われることが一般的でした。

それはお盆にまつわる次のようなお話に由来します。

お釈迦様のお弟子のひとりである目連（モクレン）尊者は、自分の母が餓鬼道に落ちて苦しんでいる姿を神通力で知ってしまいます。

自分の母を餓鬼道から救う手立てはないか、目連尊者はお釈迦さまに母を救うための方法を相談します。

お釈迦さまはいいました。

「目連よ、お前の母が餓鬼となったのは、お前だけを可愛いと思い、他の子ども達をないがしろにした業によるものである。」

「7月15日に修行を終える僧たちを供養し、みなでお経を唱え、母だけでなく、すべての餓鬼たちにも食べ物をお供えて、苦しみを抜き、樂を与えるよう、心をむけて供養なさい。」

目連はお釈迦様の教えのとおり供養を行い、苦しんでいた母を無事に餓鬼道から救い出すことができました。

このお話は、インドの言葉で「ウランバナ」といいます。仏教がインドから

中国に伝わると、ウランバナが「盂蘭盆（うらぼん）」と漢字で音写され、現在の7月15日（新暦では8月）の「お盆」行事の習慣になりました。

お盆に仏壇や新盆棚をかざり、先祖の霊をお迎えするのに、たくさんのお供物をしつらえてするのは、ウランバナのお話に由来するものです。

また、お盆に帰ってくる先祖の霊を餓鬼たちが邪魔しないように、お盆の時期に施餓鬼を行うともいわれます。（新盆の法事では、いつも施餓鬼作法をつとめています）

また、中国では7月15日は中元節に当たります。中国では、盂蘭盆会（うらぼん）のお施餓鬼でお供えしたお供物をおさげして、親しい方々に配ったといえます。

「お中元」にお世話になっている方々に感謝をこめて贈り物をする習慣も、お盆と、お施餓鬼で行われるご供養の心に由来するものなのです。